

written by **BlackCartel** illustration by みかん。



鬼丸悪為のシゴト
コンサルタント
悪の秘密結社

試し読み版

CONTENTS

プロローグ	006
第一章 悪為、決意の産声	010
第二章 悪の戦神へ	062
第三章 増殖、悪為の手下	099
第四章 モブ性奴隷と肉便器	140
第五章 桜火命、フェニックスレッドと呼ばれた男	189
第六章 アンチヒロイック・ヒーロー	222
第七章 篡奪と逸失の果てに	261



悪の秘密結社

コンサルタント

written by **BlackCartel** illustration by **みかん**。 鬼丸悪為のシゴト

プロローグ

コンビニの袋がずつしりと重たく感じる。

「たっだいまー、つと」

誰も返事をするわけがない暗い部屋。電気をつけ、俺はいつものように袋をソファへと放り投げると、その横にどかりと腰を下ろす。

「疲れたー！」

誰かが言葉を返してくれるわけではないが、言わずにはいられない。静寂を破壊するように、ぐしゃぐしゃと大きな音を立ててビニール袋を漁った。その中からキンキンに冷えた缶チューハイを取り出すと、プルタブに指をかける。

——カシュッ！

小気味いい音が出て、俺はたまらずその缶に口をつけた。

「……っあぁーっ!!」

叫びにならない叫びが、自分だけの空間を埋め尽くす。俺はこの瞬間がたまらなく好きだ。毎日の退屈な時間から解放されて、自分が自分らしさを取り戻していく、この瞬間が。天井を見上げると、凝り固まった首が悲鳴を上げる。

「はーっ……」

今週も、ようやく終わった。長かった。本当に長かった。けれど、ここからあと二日休んだら、またあの機械のように働く日々がやってくる……。

俺はぶんと強く頭を振った。

やめよう。せつかくの休みなんだ。寝て、食って、飲んで、楽しいことだけ、好きなことだけをしよう。もう一口酒を啣る。さっきまでの感動が嘘のように薄れて、まるで水を飲んでいるみたいに感じた。俺は立ち上がって、テーブルの上に缶を置く。

向かう先は『いつもの戸棚』。そこには、俺が大好きなものが眠っている。昔から今まで、ずっと。

テレビ画面には、椅子に縛り付けられた少女と、真つ黒なローブに身を包んだ異形の怪人が映っている。

「はっはっは!! 街ごと燃やし尽くしてくれるわ!」

「きゃーっ! 助けてー!!」

「ムダだムダだ! こんなところ、誰も来やしないさ!」

「待てっ!」

「誰だっ!」

「ていあーっ!! 悪の怪人バルバロンめ! 俺が相手だ!」

「はっはっは……ずいぶんと早いおでしたな、ブレイブレッド!!」

もう何十回と見たシーンを、俺は、初めて見たときと同じ気持ちで見ている。最初に番組を録画したVHSテープは、擦り切れる前にDVDに焼き直した。なぜかついつい見てしまうのだ、戦隊モノは。過去の戦隊シリーズは大体揃っているし、今放送されているものも、全部見ている。

「ぐっ……やめろ! バルバロン!」

「はっはっは!! こいつの命が惜しければ、今すぐ変身を解くのだ!!」

「レッド! ダメっ! 私に構わないでコイツを……!!」

この回では、主人公のレッドが味方のピンクを犠牲に敵を倒すか、敵の言いなりになるかを迫られる。その人間的な迷いを描いている部分が、俺は大好きだ。

「分かった……変身解除」

「レッド!!」

「はっはっは!! バカなやつめ……これでお前らをエサに、ほかのやつらも一網打尽にしてくれる!!」

でも、この展開はいただけじゃない。

——だって、そうだろう?

変身を解除したということは、怪人にとつてはこれ以上ないチャンスなわけだ。悪なら悪らしく、約束を守るなんて律儀なこと、しなくてもいい。今は、レッド一人を叩けば充分だ。その絶好の機会なのに。

「ま、それがお約束、つてヤツなんだけどね」

誰にとなくつぶやく。そして次が、俺の一番好きな

場面。

『いたっ！ やめてっ！ やめてよおっ！』

『ピンクっ!!』

『はっはっは!! 大人しくしていろっ!!』

怪人バルバロン——人間形態の名前は鬼丸おにまる悪為あくゐ——

が自ら率先して、縛り付けたピンクにムチを打つシーン。今考えたら、こんな扇情的な光景を子どもに見せるのはよくないと思う。……そう、俺みたいに、ちょっとゆがんだ性癖の持ち主が生まれるきっかけになるから。

俺は思わず自分の股間のポジションを調整する。明らかに熱を帯び始めているのが分かる。

『はあっ……はあっ……やっ……やめてえっ……』

ピンクが懇願しても、怪人バルバロンはその手を休めない。ピシピシと強く打ち付ける音に、俺の鼓動がどんどん速くなっていくのを感じた。

……そういえば、ここ五日くらい、仕事が忙しくて少しもそういう気分にならなかつたんだ……。

それを思い出すと、もうオナニーをすること以外、

何も考えられなくなってしまうた。

『そこまでだっ!』

画面の中では、ヒーローのお仲間たちがようやく到着する。バルバロンは大袈裟に驚いているが、仲間のピンチに駆けつけられないヒーローなんて、ヒーローじゃないことくらい、ちよつと考えれば分かりそうなものだ。

俺がバルバロンなら、この二人以外は行動できないように、うまく立ち回るのに。

形勢の悪くなった怪人はピンクを解放し、戦闘態勢に入る。

俺はテレビのリモコンに手を伸ばし、電源を落とした。

ピンクがバルバロンに責め立てられているシーンは好きだが、その後に続く物語は今一つなのである。それは俺の性的興奮を遮るヒーローたちに対する怒りなのかもしれない。この後、俺に素敵な性癖を植え付けてくれた怪人バルバロンは、あつさりどやられ

てしまふのだ。

俺は、もつとムチで痛めつけられているピンクの姿が見たかった。目を泣き腫らし、無様に助けを乞う凛々しかった女の姿を。

「ふーっ！」

立って大きく背伸びをすると、股間にズボンの圧力を感じる。今日のオカズは、特撮ヒロインの陵辱ものにしよう。まあ、ほとんど毎回そういう感じのモノだけだ。そんなことを思いながら、PCデスクに身体を向けた、その瞬間。

——部屋の明かりが、落ちた？

停電か？

……いや……違う。なんか、様子がおかしいぞ……？

身体が動かない!!

暗闇の中で、俺はあたりの様子を窺う。どうやら、全身をがっちりとか何かで縛られているらしい。あとは、なんだか錆び付いた金属のような匂い。背中に、硬い

板が当たっているのが分かる。

「ど、どういうことなんだ……？」

第一章 悪為、決意の産声

「あーあ」

突然、女の子の声が耳元で聞こえた。

「ひいっ……！」

情けない声を上げて驚いた俺を、その声の主は笑った。

「なんだキミ、笑わせるなよ」

「おっ、おいつ！ お前は誰だっ！」

「誰だっ？ まずキミが名乗りたまえよ」

「俺？ 俺は——」

と、名前を言いかけてやめる。バカ正直に本当の名前を答えて、何か面倒ごとと巻き込まれてもイヤだ……。

「あ……その……」

どうしたらいい？ 何でもいい、適当に偽名を……

……！

「俺は、鬼丸悪為だ！」

とっさに、さっきまで見ていた特撮モノのボスを名乗ってしまった。

「おにまる、あくい？」

少女は、へえ、と小さく漏らす。……しまった。偽名にしても、もうちよつとマシな嘘をつくんだった。

「変わった名前だな。向こうの世界ではそんな名前が流行っているのか？」

「へ？」

『向こうの世界』……？

彼女の口から出ている数少ないヒントだけで、この状況を正しく理解することなんて、到底不可能だ。ここ、ホントに一体どこなんだ……!!

「なあ！」

「ん？ どうした、モルモット」

「モっ……！」

なんだ、ヤバイぞこの感じ！ モルモットってアレ

だろ、実験動物の！

ちよつと待て、俺が何したっていうんだ？

仕事に疲れて帰って来て……酒飲みながら特撮モノ見てオナニーしようとしたただけだろ!! なんてこんな目に遭つてるんだ、俺!

「まずは明かりをつけろよ!」

「なぜモルモットに指図される必要がある?」

コイツ、俺を使って何かの実験をしようとしているのか!! この状況を乗り切るには……。

「ハッ、モルモットの俺が怖いのか?」

「……怖い?」

「モルモットに顔を覚えられるのが怖いのか、つてことき。やり返されるのが怖いんだろ?」

まずは身体の内を脱出する方法を考えないと……! 挑発に乗ってくれよ……。

「……キミは、何か大きな勘違いをしているようだな」

ダメか……?」

「私ほどの科学者が、たかが人間に恐れをなすとも?」

キターっ!! 安い! コイツ思った以上にチョロい!

俺はニヤつきそうになる気持ちを、ぐつと奥歯を噛み締めてこらえ、捕虜の苦しそうな表情を作った。

「いいだろう、私の顔を見せてやる」

彼女がそう言うと、ふわりと明かりがついた。間接照明のような、優しい光。それに照らされた俺は、やはりがっちり器具に固定されていた。

すぐ目の前にいる子が、先ほどから俺に話しかけてきていたのだろうか? 落ち着いた口調のわりに、見た目は少女にしか見えなない。

薄桃の長い髪、じとりと睨む濃紺の瞳。彼女全体からあふれる雰囲気——すべてを白か黒で判断しそうなそれ——に対し、組んだ腕の上にたゆんと乗った二つの胸だけが、大きくかけ離れたものを主張していた。

「どうだ、モルモット？」

「だから俺は……鬼丸……」

「いや、どうでもいいよ、名前なんて。どうせ覚えられないから」

「じゃあなんで聞いたんだよ！」

「……は？」

彼女がぎろりと見下ろして、うつすら笑みを浮かべる。

「モルモットをどうしようが、私の勝手だろ？」

マズい……コイツちよつとおかしい……。いや、ちよつとか？ 『かなりおかしい』の間違いかもしれない。

「私はフレア・ナット。キミの命のカギを握る天才科学者だよ」

「じ、自分で天才って言うか？ 普通」

「口を慎め」

彼女は両腕をがっちり組んだまま、ほとんど身動きもせずに俺を見つめている。

「な、なんだよ」

しばらくの沈黙が空間を支配する。何かの機器が動

いている「ピーッ」という汚い音だけが聞こえる。

「残念だ」

フレアはそう口にした。

「……残念？」

「せっかく異世界の間人をこちらに呼び寄せたというのに」

「異世界？」

さっきの口ぶりから、ここが俺の知っている世界とは違う『どこか』であることは想像していた。けれど、はつきりと『異世界』と言われてしまうと、改めて驚かされる。フレアから、はあ、とため息が漏れた。

「いいだろう。もうキミに期待することは何もないが、説明してやる。一回しか説明しないから、よく聞いておけ」

彼女の顔が俺にぐいと近づいた。……こんな状況で言うのも変かもしれないが、わりと可愛い顔をしている。自分がこれから何をされるのかも分からないのに、その顔立ちに思わず胸がどきりとした。

「私の所属する組織は、世界を恐怖で満たすことを目



的としている」

……ん？ 世界を恐怖で……？ どこかで聞いたことが
があるような、曖昧な目的だ……。

「だが、それを妨害するやつらもいるのだ……まったく苦
労なことだとは思うが……。やつらを排除するためには、怪
人を造らなければならない。圧倒的な戦闘能力を持った、忠
実に命令を聞く戦闘マシーン」

まさか……これ、特撮の世界じゃないか……？

世界を恐怖で満たすという、何の意味があるのか分からない
目標。怪人を造ってヒーローと戦うという流れ。

急に、緊張が興奮に変わっていくのが分かった。

「私はこの組織の天才エンジニアだ。異世界から物体を
転移させる装置を作り、そして運用している。そして、この
装置で呼び出した人間を、無数の怪人や戦闘員にするのが
仕事だ」

「え」

ちよつと待て。ということは、俺は……!?

「分かったか？」

「いや、ちよつと待って！ 俺、怪人にされるのか？」

「キミ程度の人間になれるものか。よくてただの戦闘員だ。……ほかに質問は？」

「ある！ あるよ！ 山ほどある！」

マズい！ これは特撮のよくある流れだ！ 変な電気を流され戦闘員にされて、何となく善戦するも最後はヒーローに殺される、という、お決まりのパターンだ！ 特別素晴らしい人生を送ってきたとは思わな
いが、むざむざ死を待つようなことだけは避けなければ！

「え、えつと……」

しかし、質問が思いつかない。

「ないのか？」

「……」

ない。

「反論や意見はある。けれど、質問はない。この世界は、俺のよく知る『あの世界』に違いないから、今更

彼女に聞きたいことなんて、何も無い。

「はあ、しかし、本当に残念だよ」

「それは、俺のセリフだ」

「……何？ こっちのセリフだ。キミのセリフじゃない」

フレアがむくれた。

「異世界の人間なのだから、ちよつとくらい特殊な力を持つてるかと思つたのだが……。まったく普通の人間とは」

「ふ、普通じゃないぞ！」

「普通だろ。キミの身体を転移させた直後に、色々と調べさせてもらつたよ」

彼女は背を向け、デスクへと向かう。

「握力は左右とも三十キログラム台後半、脚力は百メートル走十五秒程度」

机の上に置かれた資料らしきものを手に取り、読み上げる。

「両目視力が〇・八、聴力は平均。体内に毒生産能力などのある特殊器官なし。爪等は攻撃に不向き。魔法

の使用経験なし。そして、健康状態に問題なし」

ばさりと紙を放り投げる。

「普通だろう？」

そりやそうだ。今まで人と違うように生きてきたことなんてない。強いて言うなら、ほかの人よりも特撮が好きだったくらいで。

「キミみたいなのは、怪人にはできない。また『ムダな仕事だ』と、ほかの幹部にドヤされる私の身にもなつてくれ」

『「今からお前を改造する」つて宣言された上で、罵倒されてるこっちの身もなれよ！』

俺は吼えた。だが、その声は彼女の一声でかき消される。

「キミが今固定されているそれは、洗脳装置だ」

「せ、洗脳……！」

「次目覚めたときは、今の会話なんて全部忘れて、忠実な私の下僕になるんだ。嬉しいだろう？」

「んなわけあるか！　ちよ、ちよっと待て！　落ち着いて話し合おう！」

彼女は赤いレバーに手を掛けた。

「そんな余地はない。キミはこれから戦闘員になる。それだけだ」

「おっ、おいつ！」

俺は大きな声を上げた。しかし、その反応を聞く前に、目の前が真っ白になった。身体中を何かが這い回るような、気味の悪い感覚が俺を襲う。

「ああああああああ！！！！」

絶叫が止め処なくあふれる。洗脳される……！！

マズい、けど、もう……どうしようも……。

……ああ……意識が……遠……く……。

……また真っ暗だ。俺は目を閉じているのだろうか？

いや、目は開いている。それじゃ俺はまた、あの

暗い自室に戻ってきてしまったのか？　一時的に、そんな夢を見ただけで――。

ふわりと明かりがついた。

「お、ようやく起きたか」

まぶしさに何度か瞬いて、声のしたほうを見る。

――フレアだ。実に愉快そうな笑顔で俺を見ている。「どうだ、洗脳された気分は」

「洗脳……」

自我の有無を感じる、というのがどういふことかはよく分からないが……正直、これまでと全然変わっている気がしない。

「別に、なにも」

「ふふ、まあ結構だ」

フレアは俺の顔を覗き込んだまま、何かのスイッチを押した。俺の腕を固定していたアームが外れる。

「可愛い私の戦闘員」

彼女は俺の額にキスをした。

「これから私たちのために戦うんだぞ」

「あ、あの……」

「いいからいいから」

なんだろう、この違和感。

多分……多分だが……俺は、洗脳されていない。何のミスかは知らないが、特に何の変化もないように感じる。

「自分を正常だと思いうタイプの洗脳」つてのが可能なら、これで成功しているのかもしれないが……どうもそうとは思えない。

とりあえず、ここは大人しくしておくべきだろうか？

よく分からないが、彼女は完全に俺が洗脳されたと勘違いしている。キスマでするくらいだから、それは確かだろう。

……ここは流れに身を任せよう。

「鬼丸君、だったな」

「あ、ああ」

「ふふ」

彼女のしなやかな両腕が、俺の首元に絡みつく。

「私好みの、いい男じゃないか」

「え？」

フレアの言葉に、俺は思わずどきりとした。そんなことを言われたのは初めてだ。

「普通ではあるが、情欲をかき立てる身体だ」

俺はその真意が知りたくて、彼女の目を見つめた。フレアの顔はうつすらと紅く色付き、瞳がやや潤んでいる。……興奮しているのか？

「さて、私の下僕君」

「は、はい？」

下僕君。それは、間違はなく俺のことを指しているはずだった。だって、この部屋にはほかに誰もいないのだから。

彼女は、俺のシャツの中に手を差し入れた。

「ひあっ!!」

まさぐる手がくすぐったくて、俺は思わず素っ頓狂すつどんきやうな声を上げる。

「キミみたいに洗脳された人間を好きなように犯せるのが、私の特権だ」

「おか……え？」

犯せる？ つまりそれは、アレか？ 俺がいつも妄想していたネタの、まさに逆バージョン……？

「最初の命令だ。私の性欲発散に協力しろ。言う通りに、な」

フレアの顔はすっかり上気しきり、完全に雌のそれになっている。……こんな千載一遇のチャンス、逃せるわけがない。

「……はい」

俺はそれ以上のことは言わず、彼女の指示を待った。

「まずはその装置から降りて立て」

「はい」

俺はフレアが命ずるままに立ち上がる。

「よしよし」

彼女は実に満足そうに笑うと、俺の頭を撫でた。

「さすが、私の作品だ」

「ありがとうございます」

フレアは俺の代わりに、ごろんと洗脳装置の台座に仰向けになる。

「どうだ、私の身体は」

「素敵です」

「ふふふ。キミは肉体的には普通だが、『私の』優秀な戦闘員になれそうだな」

俺の答えにますます息を荒らげている。とんでもない色魔だ。そうと思っっているうちに、彼女は自ら白衣のボタンを外し始める。

「次は、私の胸を愛でてもらう」

「愛でる、ですか」

俺は思わず飛びつきそうになるのをぐっと抑えて、フレアの目を見た。

「乳首を撫でろ」

彼女は発情しきった顔で俺に命令する。

「はい」

俺は機械的に答えると、彼女に覆いかぶさるようにまたがった。そして、少しだけはだけた白衣の隙間に両手を差し入れる。

……ブラジャーをしていない！

フレアは、はじめから洗脳が終わった俺を犯して薬しむつもりだったのか。可愛いらしい外見とは裏腹に、とんでもないエロ科学者だ。マッドサイエンティスト無防備なポーズでこちらに肢体をさらす彼女を見ながら……俺の中に、突然悪い考えが浮かんできた。

俺はこの女に道具にされるところだった。報復することは、決して許されないことではないだろう。感情を表情に出さないように気をつけて、俺は彼女の下乳を撫でた。

「んんっ……」

くぐもった声が響く。

「乳首だ……乳首を……」

さっきまでの恐ろしい姿はどこにもない。ただの、愛撫を要求する少女だ。

「お願いっ……」

彼女の切ない声に、俺は指先でそこをびんと弾いてやる。

「んはあっ……!!」

乳首だけでこんなに感じるなんて。

それよりも、自分の言いなりになる男の手で感じている、その変態じみた姿に、俺の理性も限界に近づいていた。

指先で何度も、勃起した乳首を弾く。そのたびに彼女は目を閉じて背をのけぞらせる。

「はあっ……ああっ……いいよお……」

彼女はにこりと笑って俺を見た。

「それじゃあ、次はあ……」

……今だ。

俺はゆつくりと片腕を寝台の片側へと伸ばした。

これは、ただのベッドじゃない。

洗脳装置だ。

そして、今ここに寝ているのは、俺ではない。

「次から……実験結果が成功かどうか、ちゃんと確認するんだな！」

ニヤリと笑って、スイッチを押し込む。ガチンという金属音が、彼女の華奢な四肢を捕まえた。

「えっ!?!」

フレアは驚愕きょうわくを少しも隠さない。

「キ、キミっ! 何をしている!」

「何って、いや、ねえ?」

「え……あれ?」

フレアは、この短いやりとりで状況を察することができたらしい。

「なんで……」

「なんで、って言われても」

俺は装置から降りると、頭をぼりぼりと掻いた。

「俺、言ったじゃん。『気分は』って聞かれたときに『別に』って」

「いや、違う、そうじゃなくて、あれ?」

フレアは完全に混乱している。あわせて、自分が「洗脳した」と思い込み、得意げになって相手にやらせていた行為を思い出したのか、急に怒りの感情を露にする。

る。

「だっ、騙したなっ!」

「騙した? それがどうした。お前は俺のことを洗脳し、戦闘員にしようとしたんだ」

「うっ……」

「どっちのほうがひどい?」

「そ、それは……」

「他人の人格を奪って戦闘員にしようとしたお前と、他人の性欲を満たすためにお手伝いした俺。どっちが悪いやつなんだ?」

「そっ、そんなことより!」

フレアは今にも嘔み付きそうな顔をしている。

「なぜキミにこの装置が効かなかったんだ!」

「さあねえ」

俺は首をかしげた。

「異世界人だからじゃない? よく分からないけど」

どういう理屈の装置かも分からないのだから、どうして効かないのかも分からない。けれど、何か彼女が計算できていないことがあるとしたら、それは俺が「異

世界の人間だから』だということくらいだろう。

「……私が悪かった」

フレアは熱が冷め、真面目な顔に戻っている……いや、どちらかというところ『青ざめている』。

「キミを元の世界に帰してやる。だから、この拘束を解いてくれ」

「ふうん」

「……信じていないな？」

「信じられないな、到底」

俺は腕組みをして彼女を見下ろす。先ほどまでとは、完全に立場が逆転してしまった。

確かにこうして見下ろしてみると、かなり気持ちがいい。

「だって、あんなことをしようとしたんだぞ、俺にそれを今更元の世界に帰すって言われても。信じるほうがかしてる」

「ぐっ……」

フレアは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべて、目をそらした。

「それに」

でも、俺が彼女を自由にしないのは、それが本当の理由ではない。

「俺、元の世界よりもこっちの世界に興味が出てきちゃった」

「そ、そうか、それなら私が案内してやろう！ さあ早くこの拘束を」

「いや、それはいいや」

フレアの焦りが伝わってくる。

楽しい。

こんな愉快的な気持ちだったのか、さっきの彼女も。

「だって、お前を洗脳して俺の奴隷にしちゃえば、なんでも言うこと聞いてくれるわけでしょ？」

フレアは目を見開いたまま黙った。

……そうだ。俺には効かなくても、この世界の住人である彼女に対しては、洗脳は十分に効くはず。

「や、やめろ……」

震える声で、そう抵抗するのが精いっぱいようだ。

「やめろ、だあ？」

ぞくぞくする。

「やめてください、だろ」

「や、やめてください……」

俺は赤いレバーに手を伸ばす。

「さっきのレバーって、これだっけ？」

「違う！」

「嘘つきは、嫌われちゃうよ？」

この怯え方からして、フレアをこの機械で洗脳することはできるのだろう。ガチガチと奥歯を鳴らして震えている。

「やめてほしい？」

「はい……お願いだから、やめてください……！」

「ちゃんと、言おうと思えば言えるんじゃないか」

俺はうつすらと笑みを浮かべた。

「その様子だと、効果はあるんだな、お前にも」

「いや！ やめっ」

彼女の言葉が、バリバリという激しい電撃音にかき消された。

「っ!!」

フレアは一瞬目を大きく見開いたかと思うと、表情を失う……これが、洗脳か。白い閃光の向こうにいる彼女に、俺は声をかける。

「フレア」

「はい」

返答にも感情がない。

「俺の質問に答えろ」

「はい」

「この洗脳は、どれほど強力だ？」

「命令していただければ、どのようなことでもいたします」

間髪入れずに答える。どうやら、フレアの洗脳は成功したようだ。

「それじゃあ、どれくらいの時間、この洗脳は効果があるんだ？」

「永続的なものです」

「それは、一度洗脳したら、ずっと解けない、ということか？」

「その通りです」

フレアの声には、感情的なゆらぎがほとんどない。演技……というわけではなさそうだった。

「この装置は、どれくらいの間動かしていれば効果があるんだ？」

「一瞬で充分です」

「ほう」

彼女の答えを聞いて、俺はレバーを引いた。

閃光は収まったが、その光の向こう側にいた彼女は、相変わらずぼんやりとした顔で天井を見上げています。

「……それじゃあ、洗脳が終わった今の気分はどうだ？」

「私のすべては、あなたのものです」

フレアは淀みなく答えた。

「なんなりと、ご命令ください。あなたのために生きるのが、私のすべてです」

「ははは……いいね！」

俺は思わずにやつく。

「いいねえ!!」

こんなに可愛い『戦闘員』を手に入れられるなんて、俺はツイている。表情のないフレアを見て、俺ははつきりとそう思った。

「さあ、フレア」

彼女の拘束を解いてやる。

「この世界について教えてくれ」

「かしこまりました」

フレアは天井を向いたままの姿勢で語り始めた。

——この世界には、人間という一種族と、それに敵対する怪人という一種族が覇者として君臨しています。人間はほかの生物に比べて腕力では劣りますが、頭脳は優秀で、そのために繁栄を遂げることに成功しました。一方、怪人は腕力が強いのもさることながら、ほかの生物種にはない特殊な能力を開花させることで、生存競争を生き延びました。

分かるような、分からないような……。

「我々は、地球という豊かな水資源のある惑星の上に展開された文明を有しています。また同じように、人間も文明を有しており、文明自体の優劣の差は残念ながらほぼありません。我々も、また人間も、そこに存在する資源だけではなく、一見無関係な物質から生活に有用な物質を得られる科学技術が発達しています。地底から岩石くずのようなものを集め精錬することで純度の高い金属を取り出し、さまざまな物質を作っています。例えばある一定以上の高さを持つ建築物は、鉄と呼ばれる物質で強固に枠組みを作り、それを骨格として形を作っていくこととなります」

鉄を骨格として作る建築物……ビルのことか？

「なるほど……」

俺はひとまずそう答えた。つまり、違いは「怪人がいるかどうか」だけで、元々の世界とそれほど大きく変わりは無いってことでいいらしい。

「それじゃあ、怪人の文明について、もう少し教えてくれ」

「かしこまりました」

フレアの無機質な言葉が続く。

「我々能力者の有する文明は、特にここ数十年の間、人間を絶滅させるために発達してきました」

「……マジかよ」

「本当です。地球上の覇権を得る種族は、どのみち一種族です。その座をむざむざと奪われるようなことがあってはいけません」

おかしなやつだとは思っていたが、狂っているのはフレア個人ではない。……つまり、この「怪人」側の種族全体の認識として「人間は敵、滅ぼすべき」という考えなのだ。恐ろしい。

「私の所属する『エクリプス』の説明をさせていただきます」

彼女の声が一際大きくなった。

「エクリプスは人間を滅ぼすことを目的とした怪人の集団です。総統はX_{in}様といいます。私も素顔を拝見したことはありませんが、魅力的な方です。そして、

誰よりも人間を滅ぼすことを強く望んでおられます」

「Xinn、ねえ」

正体不明のトップ、つていうのは、なかなか魅力がある。

「エクリプスの幹部は私、フレア・ナットのほかに、エリヤ・ロム、ダンテインの二人がおります。エリヤは無口ですが、しっかりとした子です。ダンテインは……」

フレアの声が止まる。

「フレア？」

「ダンテインは、哀れな女です」

「哀れな？」

「自分から敵を作り、自分以外を全員敵にする天才です」

「あー……」

いるいる。そういうやつ。

「私たち幹部の部下として、所属する怪人がおります。怪人たちはそれぞれに個性的な能力を持ち、日夜人間を滅ぼすために活動を続けています」

「そんなに毎日活動していたら、本当に人間を滅ぼせるんじゃないのか？」

「それは、難しいのです」

「どうして？」

彼女が、柔らかく唇を噛んだ。

「邪魔者がいるのです」

「邪魔者？」

「そうです」

彼女が、俺を見た。突然のことで、驚いて息が止まる。

「ホーリーファイブ」

「……なんだ、それ」

「彼らは、私たちの活動を妨害します」
つまり、そいつらがいわゆる『正義の味方』つてこ

とか。俺は腕を組んだ。

「ホーリーファイブの戦力はどれくらいだ？」

「私たち怪人が本気を出せば、恐らく一瞬で活動不能になるでしょう」

「……じゃあ、本気を出したらいいじゃん」

「……」

フレアは黙ったまま、俺を見つめている。

「な、なんだよ……」

「いえ、斬新なアイデアだったもので」

……斬新？　なんだそりゃ。意味が分からないぞ？

一瞬そう思ったところで、ふと思いついた。

まさかとは思いますが、こいつら『特撮モノの悪の組織』

そのままの存在なんじゃないだろうか？　世界征服をやたらとまどろっこしい手段でしかやらない、悪役の彼ら。この世界の怪人たちも、まさかそんな手段ばかり取っているのか……。

「これは面白いな」

俺は、ふう、と大きなため息をついた。

「ありがとう、この世界について、大体理解できたよ

うな気がするよ」

「どういたしまして」

彼女が表情のない瞳で笑った。

「じゃあ、次の質問」

「なんなりとお申し付けください。私で解決できることであれば、なんでもお受けいたします」

俺は彼女の顔を覗き込んだ。

「お前、俺に何か隠し事はあるか？」

フレアは少しだけ目をそらした。

「ありません」

「嘘だな」

「嘘ではありません」

「それじゃあ、質問を変えよう」

その言葉に、フレアの目がもう一度こちらを見た。怯えているのか、フレア・ナット。いいぞ、その表情……。

「お前はこの事態を予測していたな」

「……」

彼女はつい先ほどとまったく同じ反応を示す。

そう。俺はこいつに、先ほどから違和感を覚えていた。彼女の解説は、まるで本人に『主観』があるかのようなものだった。

「分かりやすすぎる」

自分の感覚が研ぎ澄まされているのを感じる。素晴らしい気持ちだ。俺は今、この女を完全に凌駕している。

「いつか自分が、何かの間違いで逆に洗脳される事態を想定していた」

「想像もしていませんでした」

「そうか」

フレアの顎あごに手を添えて、くいと顔を持ち上げる。悔しいか、フレア。可愛らしい顔で目に涙を溜めて。

「もう一つ質問だ。お前の記憶のバックアップは、どこにある？」

「!!」

彼女の目が見開かれた。大当たりだ。

「そつ、そんなものは、ございませぬ」

「そんな言葉で俺を騙せると思ってるのか？ 表情

にすべて出ているぞ」

笑いがこみ上げてきた。

「普通、ウィルスの研究者っていうのは、バイオハザードを警戒して多少のワクチンを作っておくもんだ。そうだろう？ そうじゃなかったら、自分が感染して死んでしまうかもしれないだから」

脳の中をアドレナリンが駆け巡る。

「もし俺が『洗脳装置』なんてヤバいものを作るなら、最初から自分には効果を発揮しないようにしておく。でも、お前には効いた。つまり、フレア・ナットは洗脳できる。その代わり、一定期間で洗脳が解けるように調整しているはずだ。違うか？」

フレアは眼輪筋をわずかに強張らせている。

「答えろ。お前に用意された回答は『はい』か『いいえ』だけだ」

彼女は一瞬考えた。それから静かに、「はい」と答えた。

「洗脳ができる装置を作れる、ということはおよそすべての脳の構造を、少なくともフレアは知っている」

「はい」

「脳の中には感情や欲求に作用するポイントが存在しているが、洗脳した場合は、その部分を介さずに行動するような回路に組み替える。その行動が、洗脳だな」

「はい」

「洗脳を解くために必要な、自分の脳のバックアップを取っている」

「……はい」

「フレア、お前の脳のバックアップは、どういう風に取っているんだ？」

「洗るような素振りを見せたフレアを、俺は恫喝^{どまか}する。」

「言え」

大きく息を吸い込んで、彼女の胸が空気で膨らんでいく。観念したのか、ゆっくりと柔らかそうな口元が動き出す。

「私の脳のデータは、二時間ごとにデータクリスタルという情報媒体に自動バックアップされています。更新したデータが、前回記録されているデータとあまりに大きな変化が生じているときには、私の脳が前回保

存されているデータに上書きされ、自動的に修正されます」

「つまり、二時間以内にフレアの洗脳は解ける」

「はい」

「それは……」

胸が高鳴る。誰かを追いつめ、自らの思い通りにできるといふ、この超越感。ほんの数分前までの形勢を逆転し、今まさにチェックメイトの一声をかけようとしている俺。表情が、ニヤつきが、抑えられない。どんな表情をしているのか、想像するだけでも恐ろしい。俺は今、この戦いに勝利しようとしている。それも、完璧に、完全に、抵抗される余地もなく。

「それは、困ったなあ」

あたりを見回すが、どれがデータクリスタルかなど、俺には皆目見当もつかない。銀色に光るパソコンのよなもの、おもちゃにしか見えないボール、ホログラム……。よく見てみれば、SFの世界そのものだ。

これが、悪の組織の基地。

……ああ、俺、『悪の組織』に潜入しているんだ。

改めて、変に実感が湧いた。

「よし」

それと同時に、自分の中で何かが弾けた。

俺は、悪の組織にいる。悪は、悪に。徹底的にやらなくちゃ。

……それに、これはどうせ現実の世界じゃない。現実が何か、なんて難しい話はひとまず置いておくとして、ここは少なくとも、ついさっきまでいたあの一人きりの部屋の世界とは明らかに一線を画した『どこか』だ。

夢ならそれでいい。異世界なら、なおいい。俺のやりたいように、やらせてもらう……！

「フレア」

「はい」

「データクリスタル、つていうのは、なんだ？」

フレアは相変わらず単調なトーンで答える。

「データクリスタルは、とても珍しい物質です。デジタル化した情報を保存する媒体としてきわめて優れ、通常の電子的記憶媒体の一兆倍以上のデータを保存す

ることができ、また、数万年の間劣化しません」

「書き換えや更新に必要な媒体は？」

「データクリスタルはデータを保存すること、保存したデータを取り出すことには優れていますが、そこに保存されたデータをコンピュータなどに取り込んで編集することは不可能です」

「完全に独自の保存形態、つてわけか」

「はい」

つまり、脳科学の『の』の字も分らない俺には、データの書き換えは不可能……。

「仕方ないな」

俺はフレアを睨んだ。

「立て」

「はい」

彼女は命令のまま立ち上がり、俺を見た。焦点が合っていない。

「データクリスタルを、ここへ持つてこい」

「データクリスタルは、とても珍しい物質です。素手で触れることは、学術的観点からも避けたほうが……」

「うるさい、命令だ。早く持つてこい」

フレアは、俺の怒声に背筋をびくつかせた。

「はい」

抵抗は見せるが、それでも語気を強めた命令には素直に従う。この洗脳装置、さつき俺にも効いてたら、一体どうなつてたことか……。

「こちらです」

彼女は、紫に輝いているピンポン玉のようなものを手に乗せていた。

「この中に、フレアのバックアップが入っているんだな？」

「はい」

俺は彼女の手から、それを奪い取る。

「あつ」

「なんだ、文句でもあるのか？」

「データクリスタルは、とても珍しい物質で……」

「黙れ」

「は、はい」

フレアをいなすと、彼女は情けなく伸ばした手を下

ろした。

「これで、お前のバックアップは全部か？」

「……はい」

「そうか」

それなら、こうだ。

「あつ!？」

フレアの悲鳴が聞こえた。俺は大きく腕を振り上げると、そのまま真下に振りぬいて、それを地面に叩きつけた。

データを保存する水晶。衝撃に強いはずがない。それは予想していたよりももっと脆く、もっと儂はかなく、そして綺麗に砕け散った。

次の瞬間。

びしっ、とフレアが敬礼し、笑顔を浮かべた。

「……フレア？」

「はいっ!」

彼女は、笑顔でハキハキと返事をした。先ほどと違

い、その笑顔からは明らかに知性を感じさせない。まさに特撮の『戦闘員のポーズ』だ。……少しだけ思考を巡らせる。これは想像だが、実はクリスタル側からも彼女にアクセスすることができたのではないだろうか。クリスタルを要求したときに抵抗する様子を見せたのも、クリスタルからの感情へのアクセスがあったからと考えれば納得がいく。そして、クリスタルを破壊した瞬間、先ほどまで存在した『無感情』という感情すら消滅し、彼女はこうして、笑顔を浮かべた。

……本当は、洗脳されると笑顔になるのか。

待てよ。だとしたら、なぜ俺を洗脳済みと勘違いしたんだ？ もしかして……俺はあの状況で薄ら笑いを浮かべていた、とか……？

我ながら恐ろしい想像をしてしまい、背筋が寒くなった。

「にしても……大丈夫だろうな、コレ」

フレアをマジマジと見る。さつき「自分は幹部だ」と言っていた。幹部がこうなつたと知れたら、俺はタダじゃ済まないだろう……。洗脳されて無駄死にする

のはごめんだが、^{また}颯られて殺されるのがいいというわけでもない。

「……どうしよーかな」

これじゃ、この女はただの戦闘員。知性の欠片も感じられない。

「最低限の受け答えができてくれれば、それでいいんだが……」

「はいっ！」

……可愛らしい返事はありがたいが……。

「ま、なんとかなるか……」

俺は頭をぼりぼりと搔いた。

そうだ。テストしておかなくては。彼女の洗脳のレベルがどれほどか確認しておかなければ、手駒にするにしても、誤魔化すにしても、都合が悪い。

「よし、フレア」

「はいっ！」

「動くな」

「はいっ！」

敬礼したまま笑顔を浮かべる彼女の股間に、俺はゆ

つくり手を伸ばした。

動かない。

これくらいのことでは動じないらしい。

「よし、フレア、いいぞ」

「ありがとうございますっ！」

「次は、こうだ……まだ動くなよ」

俺は割れ目に指を這わせる。

なるほど、その綺麗な身体にちょうどよく、ぴった

りと閉じているのが分かる。

「フレア」

「はいっ！」

「ここを濡らせ」

「はいっ！」

彼女は元氣よく答える。

「……んっ！ ……っはあっ！」

ちよろろ……と俺の指先を、温かいものが伝ってい

く。

「えっ!？」

フレアは、その場で放尿していた。

「はい！ 濡らしましたっ！」

敬礼したまま、嬉しそうな呆けた笑顔で彼女は言う。

「どうやら、濡らす、という言葉の意味を直接的に解釈

したらしい。実験体に乳首を弄いじらせるような変態なの

に、変なところはウブだ。実験ばかりして過ごしてき

た弊害なのだろうか。

だが、その常軌を逸した痴態に、俺はだんだんと興

奮してきていた。

この女は、俺の言いなり……好きなようにしてい

んだ。

「フレア、その装置の上に仰向けになれ」

「はいっ！」

フレアはごろりと横たわると、再び敬礼のポーズを

とる。これが戦闘員のデフォルトの姿勢なのだろうか。

「よし、敬礼をやめて、両脚を開け」

「はい！ これでよろしいですか!？」

装置の両脇に足を引っ掛け、大股を開くフレア。自

分が今していることの意味も分からず、恥辱の感情さ

え抱いていないようだ。

「いいぞ」

俺は自分の中の声に押されるままに、どんどん彼女を汚してしまいたくなった。

「それじゃあ、そのままにしている」

「はいっ」

俺は彼女の股間に顔を近づける。

……すつきりとしたフォルムなのに、柔らかそうで、少し甘酸っぱい匂いがある。……これが……この女の……。思わずそこを凝視する。そして、左手で優しく撫で上げた。

「あっ……」

フレアが小さく悲鳴を上げる。

「どうした？」

「分かりません！」

笑顔のまま顔を赤らめた彼女に、胸がぐいと締め付けられる。だが、いきなり俺を犯そうとしたくらいだ……セックスの経験がないなどは考えられない。

「それじゃあ、分からせてやるよ」

俺は彼女の股間でわずかに勃起し始めているクリトリスに爪を立てる。

「いっ……」

身体をびくりと震わせて、切ない声が漏れる。

「動くなど言っただけだ」

「も、申し訳ありませんっ！」

なおも笑顔だが、その表情は少しだけ崩れつつある。壊れかけているのをいいことに、俺はさらにそこを擦ってやる。

「あっ、ひっ、んっ……」

動くなともう一度命令してやれば、今度は身体をまったく動かさない。それでもどうしても抑えきれないらしく、か細い喘ぎ声だけが部屋に響いている。

彼女の内側が、どんどん湿り気を帯びてきた。土手の肉も充血して赤く腫れあがり、淫猥な花を咲かせている。

「んっ……はあっ……」

どんな表情をしているのか気になって、ちらりと顔を覗いた。呆けた笑顔は、まったく変わらないように

見えたが、少しだけ上気しているようにも見える。口の横に一筋、涎が川を作っている。……びしつとしていれば美人にも見えたが、こうなるとただの痴女。もし、彼女がこんな風になったことが周囲にバレたら……。

「クソツ、知るかつ！」

俺はこの後に待っているだろう『フレアの上司』との遭遇を想像して、そう吐き捨てた。どうなるかなど考えていても仕方がない。とにかく、今はこいつで遊んでやる。

……ふと、目の端に、さっきフレアを洗脳した、この装置のレバーが映りこんだ。

「そうだ」

頭の中に、またよからぬことが浮かび上がってきた。洗脳装置を、この状態で作動させたら、どうなるんだろう。二度掛けで、さらに強力な洗脳をすることができるのだろうか？ それとも、もしかして元に戻ったりするのだろうか？ マシーンが作動しているときに刺激——快楽を与え続けたら？

俺は湧き上がってくる好奇心を抑えられず、スイッチを押すことにした。寝台の装置が、再びフレアの四肢を押さえ込む。もちろん、フレアに抵抗する様子はない。

「フレア」

俺は彼女に声を掛ける。

「はいっ……あんっ……」

「喜べ、実験だ」

「実験……ああっ……はあっ……あっ……」

フレアは口元だけで微笑んだ。

「あんっ……ありがとうございますっ……うっ……」

右腕を伸ばし、ガシツ、とレバーを掴む。

「いくぞ」

軋む金属音。

「あっ、ああああっ……!？」

バリバリと白い閃光の中に俺とフレアが取り込まれている。

「俺には効かないってことは実証済みだからなっ!!」
とはいえ、電流のようなものが流れているのは感じ

る……。一応これくらいにして……。もう一度レバーを戻す。

「はあっ……。ああっ……」

「どうだ、フレア」

俺は彼女のクリトリスを撫で続けた。

「ああっ……。悪為さまあっ……」

「……。んうっ!？」

突然俺の名前を——とはいえ偽名だが、呼んだ彼女の目がぎゅっと閉じられる。

「気持ちいいですっ……!」

先ほどまでのフレアとは、明らかに様子が違う。少しだけだが、知性の光が戻っているように見える。これは、実験成功……。いや、結果を予想していなかったのだから、成功も何もない。

「そうか。気持ちいいか」

動揺を悟られないように、あくまでも上から視線で接する。

「はいっ……。悪為さまのお手々……。優しくてきゅんきゅんしちゃいますっ……」

先ほどまで……。どころか、俺の知る彼女は完全に消えてしまったようだった。フレアは、愛しい恋人にそのような態度を俺に向けている。俺をそんな風に認識する時点で明らかに正常ではないが、知性だけは戻っているように見えた。

これは面白い。この洗脳装置、ただ脳内の情報を消去するだけでなく、こんな機能まであるなんて。

——スパイ作りたい放題じゃないか。フレアをただの研究者としてここに閉じ込めていたやつらは、よっぽど無能なのか？

……。ただ、それよりも、彼女が出す発情した雰囲気、俺はあてられ始めていた。

「悪為さまっ……。お願いしますっ……。フレア、いい子にしますからあっ……!」

ほんのりと薄桃に色付く身体をくねらせて、彼女がうめくような声を発する。

「悪為さまのためなら、なんでもしますっ……。悪為さまが命令してくれたことは、全部しますっ……」

瞳は熱く潤み、頬は赤く染まっている。

「フレアになんでも命令してくださいっ……お願いっ……悪為さまあっ……!!」

「分かった」

「……もう、我慢できない。」

「フレア」

「はいっ!」

名前を呼ぶと、彼女は幸せそうに返事をした。

「そのまま待て」

「はいっ……!!」

彼女は肩を上下に震わせている。俺は……ズボンを下ろした。「射精したい」という脳内からの声が、止

まない。フレアは、俺の勃起したそれを見たのだろう。

「ああっ……」と小さく声を漏らした。

「フレア」

「はいっ……」

俺は彼女の名をもう一度呼んだ。そして、開かれたままになっている両脚を抱え上げる。

「好きなように、感じる」

「ありがとうございますっ!」

フレアの返事が聞こえる前に、俺が彼女の中へと潜り込んでいく。

「んああああああっ!!!」

きょうせい
嬌声が響き渡る。

「ぐっ……きつつ……!!」

「悪為さまあっ! 嬉しいですっ! フレアのおま○こ使ってくださいっありがとうございますっ!」

間違いない、彼女は堕ちている。それも、俺を誰だかしっかり認識して……。

「動くぞ」

ぐいと腰を前に突き動かすと、ぎっちり締め付けている膣がゆつくりそれを奥へと招き入れる。

「んおおおっ……!!」

ひと突きごとに、彼女はケダモノのような大声を上げて応える。

「悪為さまあっ! 悪為さまあっ!」

ここに来たときは、こんな『洋物A V』のような求



められ方をするなんて少しも思っていないかった。が、決して悪い気はしない。

子宮口と鈴口が幾度となくキスをする。じゅぶじゅぶという、はしたない水の音。彼女の柔らかそうな胸をぎゅつと掴んだ。

「んいいっ!!」

そして、むしゃぶりつく。

「はあんっ! ああっ! はあっ!!」

感度が素晴らしくいい。

「悪為さまあっ!」

だんだん、自制が利かなくなってきた。もつといっぱい鬨つて、失神するくらい犯し抜いてやろうと思っただが……。もう、フレアに種付けすることしか考えられていない自分がある。

「イクぞ、フレア」

「お願いしますっ! 中にっ……おま○こに出してくださいっ!」

フレアが俺を抱きしめた。

「私の卵子にザーメンぶっかけてくださいっ!」

「ぐっ……イっ……イクっ……!」

奥歯を、ぐいと噛み締めた。彼女の鼓動に、自分の心音が重なるのが分かる。

びゅっ……びゆるるっ……びゆるるるるうっ……。

「はああああっ……!!」

フレアのため息にも似た甘い声がかかる。……

長く、いつまでも終わらないとさえ思われるような射精。

「フレア……」

俺は彼女に声をかける。

「離せ」

「は、はいっ……」

フレアは慌てて俺から腕を下ろした。

「申し訳ありません……」

「……」

フレアからゆつくりと離れる。

「はあんっ……」

二人の陰部の間を白い糸が繋ぐ。少しだけ間を置き、冷静になって彼女に質問を投げる。

「フレア、どうして命令にない行動を取った？」

「そ、それは、その……」

彼女は顔を赤らめて、俺から目をそらした。

「悪為さまのおちんちんが気持ちよくて……つい……」

……

……『つい』。やはり、自我が戻っているのだろう。それに伴い、洗脳の強制力も薄れているようだ。

「つい、なんだ？」

「……私の一番奥に、悪為さまの遺伝子を注いでほしかつたんです……」

しかしその強制力の代わりに、洗脳された対象に不変の愛情を抱くようになる、と。どうやらそういうことらしい。

「フレア」

俺は彼女の太ももで自分のペニスを拭いた。柔らかい肌を、二人分の体液が汚す。

「お前の脳のバックアップメモリはあるか？」

「それなら先ほど、悪為さまが壊してしまったじゃないですか」

「さらに非常用のバックアップがあるとか」

「ごさいません」

俺は放り投げていたズボンを穿く。

「フレアは、もう悪為さまのものです」

「ほほう」

……もしかしたら洗脳装置には、一度初期化した脳の回路を再構築する工程も組み込まれているのかもしれない。

「フレア」

「はい」

「俺は、フレアの、なんだ？」

「はい、ご主人様です」

「それじゃあ、フレアは俺のなんだ？」

「ペット、おもちや、肉人形、奴隷、ザーメン捨て場」

好きなようにお呼びください」

「いいだろう」

俺が振り返ると、彼女も起き上がり俺を見ていた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>